

## ロートレアモンに於ける悪

福 田 き み こ

フェルボックホーフェン氏に宛てた手紙からも知れる様に、ロートレアモンが散文詩「マルドロールの歌」に於て「悪」を作品の主題として選んだことは、明白な事実である。ところで、ロートレアモンによって歌われる「悪」は、一体、如何なる役割、意義を持つものなのか。この点を解明するのが本稿の目的である。

「マルドロールの歌」で歌われる「悪」は二種類に大別される。一つは、作者が自らの周囲に見出すところの「悪」であり、もう一つは、主人公マルドロールによって犯される「悪」である。本稿では紙面の都合上、後者を中心に考察を進めることにするが、その前に前者について、ここで極く簡単な説明を加えておくのが望ましいと思われる。作者は、「マルドロールの歌」の主に最初の部分、第一の歌、第二の歌に於て、様々なタイプの悪徳、不条理、悲惨などの枚挙にいとまが無いが、作者の主たる批判の対象となるのは、十九世紀キリスト教的ブルジョワ社会の分泌する「悪」である。ロートレアモンは、彼の同胞である人間達への呪詛を何度も繰り返すが、それはあくまで、固定化された偏狭なモラルの枠組を強要するキリスト教的ブルジョワ的精神風土の中に住む大人達への憤激であって、その枠外に身を置く人々、例えばまだ悪に染まっていない幼い子供、或いは、いわゆるブルジョワ社会から疎外された人々 — 娼婦、墓堀人夫、屑拾いなど — に対しては、限り無い優しさと共感の念を禁じ得無いのである。作者は、人間の精神の自由と独立を奪い取るものとして、キリスト教の立法者としての神に激しい攻撃の矢を放つが、とりわけ問題になるのは、キリスト教に於ける魂偏重の傾向と、その固定した善悪に対する視座とである様に思われる。

ところで、この様に「悪」を激しく憎悪する作者が、自分の主人公に「悪の生涯」を歩ませることの意味は何処に在るのか。

第一の歌の冒頭に近い部分に、マルドロールの中に「生来の邪悪さ」がある事、それが原因でマルドロールが「悪の生涯」に足を踏み入れるのを決意する事、同時にその「邪悪さ」が「子供のばら色の頬を剃刀でそぎ落す」行為を指す事などを述べている箇所が見出される。これによって、我々は、マルドロールの行う「悪」の基本的性質が如何なるものであるかを知る事が出来る。つまり、マルドロールの言う「悪」とは、いわゆる残虐な暴力行為を指し、それは自らの中に本来的に存在するものから由来しているという事である。この点を更に明確にする為に、マルドロールの幾つかの暴力の場面を例にとり分析を加え

ることにする。

先ず最初に、第一の歌第六節で歌われるエピソードを挙げよう。ここでは純真無垢な一人の若い少年に対する残虐行為が描かれる。作者は次の様に夢想する。

「それから突如として、子供が少しも予期していない瞬間に、長い爪をその柔い胸に殺さない様に突きさす。というのは、もし死んでしまったら、子供の苦しむ光景をそれっきり見る事が出来なくなるからだ。」

マルドロール、或いは作者によって夢見られる暴力行為は常に少年を対象にしているとは限らない。彼は、しばしば、同胞である人間への憎悪から彼等の全滅を願う。が、作者の人間への憤りも、無垢な青少年だけはその例外として認めるのであるから、当然、ここに描かれる暴力も、対象が一般人類の場合とは異質のものとして解釈されなければならない。つまり、ここでの暴力は決して相手に対する憎しみの感情の結果では無く、従って、死によって相手を抹殺する事を目指しているのでは無い。ジル・ドゥルーズによれば、サディズムは大きく二種類に分けられる。一つは、勝利のみを追求する純粹に攻撃的サディズムであり、他の一つは、他者の苦痛を求める、性的快楽を伴ったそれである。そして、この節で描かれる残虐行為が、第二番目のサディズムの典型的パターンを示している事は誰の目にも明らかであろう。サディズムとマゾヒズムが同一人物に於て同時に共存し得る事は、一般に良く知られている事だが、この事は、同じエピソードの中の次の一文、

「しかしながら、僕は自分の犠牲者と同じ位、苦しんでいたのだ。」

に於て明瞭な形で示されている。又、少年に対する攻撃手段として「爪」が用いられている事実に注目しなければならない。何故なら、「爪」を突き立てたいという欲求は、性的欲望の最も基本的衝動に呼応するものだからである。少年に対する他のもう一つの攻撃手段である「歯」の持つ欲求も同様に説明される。この様に、ここで用いられる「爪」と「歯」という二つの攻撃手段が、サディズムという形態のもとに展開する性的想像を支える機能を荷なわされている事は明らかである。

今挙げた例程、完全な形では示されていないが、同じくサディズムの一例と思われる次のエピソードを取り上げてみよう。第二の歌第五節に於て、作者は、日々の散歩の折に見かける十二、三歳の愛くるしい少女についての様々な空想を繰り広げる。若い娼婦かも知れぬそのいたいけな黒髪の少女に、作者は一瞬、愛情らしきものを感じかける。がその直後、少女の成人した時のイメージが作者の脳裏をかすめるや否や、作者は激しい憎悪に我を忘れてしまう。そして少女に対する暴力行為が思い描かれる。

「俺は錯乱の拍子にお前の腕を掴んで、洗濯物をしぼる様にねじあげ、或いは、二本の枯枝の様に腕を折って無理矢理にお前に食べさせるかも知れないぞ。お前の頭を優しく撫でる振りをして両手で掴み、食欲な指をお前の無垢な脳葉の中に突込んで、生涯休む間の無い不眠に悩んでいる俺の目を洗うのに役立つ脂肪を、唇に微笑を浮かべながら引っ張り出すかも知れないぞ。(中略)俺は又、お前の処女の肉体を鉄の腕で持ち上げて、足を掴んで

投石器の様に振り回し、最後の円を描く時に力をふりしぼって、壁に叩きつけることだってやるかも知れんぞ。血のしずくは人間の胸にとび散って、全ての人々を戦慄させ、俺の悪の実例を示すだろう。」

前の例に於けるサディズムがその完全な形のもとに描かれていたのに比して、この例では、二種類の質の異なる暴力が混じり合った形で示されている。少女の脳葉に突っ込まれる「爪」のイメージに、我々は前の例に於けるのと同様、性的快楽を伴ったサディズムのあらわれを認める事が出来るが、少女に対する暴力の後半の部分は、作者の人間に対する憎悪の表出と考えた方が、より適当であると思われる。人間の体をつかんで、それを振り回すというイメージは、ラ・マルティエヌの詩にも見られるイメージであり、そこでは、振り回される人間の体は投石器或いは剣にたとえられているが、ロートレアモンのこのパッセージに於ても、少女の体は、人間に対する攻撃の為の一種の武器として思い描かれているにちがいない。尚、この場面にはマゾヒズムの痕跡が見当たらないが、それは、ここでのサディズムが完全な形をとってないことによるものと解釈されるべきである。

次に挙げられるのは、「マルドロールの歌」の中で、恐らく最も恐しいと思われる一場面である。ブルドッグを連れて散歩中のマルドロールが、ブラタナスの木陰に眠る一少女に目をとめる。マルドロールとブルドッグとで交互に、この無抵抗の少女を凌辱した後、彼は最後に「骨の折れる、ひな鳥の臓物抜き」という厄介な仕事にとりかかるのである。マルドロールは鋼鉄のヒドラのついたアメリカナイフを取り出し、刃を装備すると平然として「不幸な娘の膣を掘りあさる用意をする。この大きくなった穴から、彼は次々に内臓を引っ張り出す。腸、肺、肝臓、そしてついには心臓そのものまでがその根元からむしり取られて恐しい裂目から日の光のもとに引きずり出される。」この常軌を逸した行為の動機は、犯された娘の母親によって、マルドロールの人間への想像を絶する憎悪の故と説明されるが、決してそうではない。母親の発言は、マルドロールの犯罪の正当性を主張する事によって、作品の中に於けるマルドロールと他の人間達との関係をはっきりさせておくという、作者の意図から出たものであって、ここに提示される行為そのものは、極端ではあるが明らかにサディズムの一形態とみなされるべきである。例えば、ボードレールの作品の中には、生体解剖に比較された愛の行為を歌った箇所が見出されるし、サドの作品の中からも、これに似通った行為の描写の部分を拾いあげる事が可能である。事実、相手の隠れた内部にある全てのを力づくでひっぱり出し、自分の目の前に曝け出したいという衝動は、性的願望の無意識の一側面を表わしていると言えよう。何故なら、対象を自らの視線の支配下に置くという事は、ある意味で対象を所有する事にほかならないからである。相手の全存在を所有し、自らの中に取りこむことによって相手との完全な一体化を願う、これが生命の最も根元的な表現形式の一つであるところの性の基本的欲求である。尚、この場面で描かれるサディズムは、マルドロールの気絶という形で示されたマゾヒズムを伴っている。気絶という状態が死に類似しており、死がマゾヒズムの究極に位置している事は、言うま

でもない。

最後にマルドロールの主な暴力行為の例をもう一例だけ挙げておこう。第二の歌第十一節で語られるのは、天使の姿に変身した教会のランプに対する、暴行のエピソードである。第二の歌第五節の黒髪の少女のエピソード同様、この例に於てもサディズムは異質の暴力との混合体という形をとっている。その理由は、暴行の対象である天使という存在のもつ二重の属性によって説明される。ランプから変身した天使を前にして、マルドロールは考える。「しかしこれは神の使いなのだ。」と。この考えは、人類、神に対するあの憎悪の激情へとマルドロールをかり立てる。が一方、天使は多くの宗教画に見られる様に、おさな児という側面を持っている。そこで天使に加えられる暴行は、必然的にサド・マゾヒズムの様相をも呈することになる。

「彼（マルドロール）は体をかがめて、唾だらけの舌で哀願の眼差を投げる天使の頬をなめる。（中略）おお……見ろ！ ほら見ろ！ 白とばら色の頬が石炭の様に黒くなったぞ！ 腐った毒ガスを出している。これは脱疽だ。もう疑うことは出来無い。侵蝕性の病毒が顔中に拡がって、そこから下の方の部分へと猛威をふるって行く。すぐに、全身が一面の汚らわしい傷でしかなくなってしまおうだろう。」

我々はここでの描写に、サディズムの明白な一形態を読み取ることが出来る。何故なら、自己の体内から出る毒が、相手の肉体を徐々に腐蝕へと導いてゆくのに立ち会う快樂は、これと同質のものを性的快樂の中に見出す事が出来るからである。ボードレールも又、恋する女に対して、「かくも鮮やかで、かくも美しい、この新しい唇から僕の毒液を注ぎ込みたい」欲望を歌って、上記のサディズムと同じパターンの一例と成している。尚、通常、サディズムに付随してあらわれるマゾヒズムの痕跡については、それがこの場面では、天使にむかって表明される赦しへの願望という形で表わされている事を付言しておこう。

以上、主人公によって犯される「悪」の具体的な内容が、これまでの分析で一部明らかにされた。要約すれば、それは性的快樂を伴ったサド・マゾヒズムだということである。ところで通常サディズムは、それが生殖と結びつかないという理由で、異常な欲望とみなされている。が、サディズムの特徴である攻撃の欲求は、男女間のいわゆる正常な性的行為の中にも多かれ少かれ見出される。フロイトによれば、性行為をふいに目撃した子供がそれを暴力行為ととらえる事はほぼ間違いない、と言う。事実、性とは元来一種の闘争行為であり、この意味で生命はその最も生物学的次元に於て、最初から悪の刻印を押されているとって差しつかえない。この点に関するボードレールとサドの意見は互いに一致している。が、此処を出発点として、二人の思想は異った方向に発展して行く。カトリックであるボードレールはキリスト教の定めた視座にとどまり、自然の中に本質的に刻み込まれた悪の存在を目にするや否や、自然に対する懲罰の義務を自らに課すのである。つまり、美しく生命力に満ちあふれた女の肉体に加えられるサディスト的行為は、この詩人の自然に対する懲罰の表現形式なのである。この様に、ボードレールにあっては、サディズムは

どちらかといえば倫理的、宗教的次元で把握されていることがわかる。これに反してサドは、自然のもつ邪悪さの中に、全ての生命体を律する法則 — 自然は破壊によってのみ自らの創造を実行する — を見出す。それ故、自然の一員である人間も又、その要求するところに従わねばならない。

ところで、ロートレアモンはこの問題をどの様に把握しているのだろうか？ 彼にとって、主人公の犯す「悪」は「聖なるもの」、「美しいもの」である。ロートレアモンは、ボードレールの様に自然の息の根を止め様ともしないし、又、サドの様に単に自然の客観的観察者としての立場にとどまるわけでもない。作者の表現を借りれば、マルドロールの数々の犯罪は「輝かしい」「神聖な」行為なのだ。当然の事ながら、「悪」或いは「醜悪さ」のシンボルとして作品の中に姿を現わすマルドロールも、いわゆるブルジョワ社会に属していない、従って既成の偏狭なモラルの影響を受けずにすんでいる人々の目には、「善良」で「美しい」存在に映じるのである。例えば第一の歌第十二節では、一人の墓掘人夫がマルドロールにむかって、

「あんたの気高い体にさわらせてくれ」

と話しかけるのが聞かれるし、同じ墓掘人夫が、マルドロールの髪を

「今までに見た最も美しい髪」

と表現している箇所を拾い出す事も出来る。又、第一の歌第七節には、同じくブルジョワ社会の枠外に住み、世間からの非難と軽蔑の視線に身を曝す若い売春婦が、マルドロールに向かって次の様に言う場面も見出される。

「私を軽蔑しないのは、あなたと暗い深淵にうごめく怪物達だけ。あなたは良い人だわ。」

これまでのところを要約すれば次の様になる。つまり、作者が作品の主人公に行わせる「悪」とは、サド・マゾヒスト的行為を媒介として表出される肉体的生命力の躍動そのものであり、作者がそこに非常な重要性を付与しているということである。

ところで作者のこの思想は、性的想像力が宗教的表現を借りて記述されている幾つかのパラグラフの中にも、同様に読み取る事が出来る。例えば第五の歌第五節で、作者は自分の精液の及ぼす力について次の様に歌っている。

「だが、僕の精液のしづくは何という力を持っている事か。嗅覚神経でもってそれを吸い込む人々を全て、引きつけるのだから。彼等はアマゾンの川岸からやって来る、ガンジス河が潤す谷間を横切ってやって来る、極地の苔を見捨ててやって来る。僕をたずねて長い旅をやり遂げようとするために。」

このパラグラフにあらわれる作者の精液は、いうまでもなく人間の生物学的意味での生命を象徴しており、この後に続く部分では「精液」は「聖なる」という形容詞を付されて何度か用いられている。又、その匂いに引きつけられて世界の各地から人々が集まって来るというイメージは、聖地エルサレムに向けてのクリスチャンの巡礼の旅を容易に想像さ

せる。ここでも、精液の持つ力を神の全能に置き換えることによって、肉体的生命の復権を効果的に宣言しようとする作者の意図は明白である。

この例の他にも、作者の同様の意図を示すものとして、神との男色行為を描いた場面を挙げることが出来る。神の肛門にたとえられたこの世界を、作者のペニス破壊するという夢想は、とりもなおさず、作者の抱く肉体的生命力の勝利への願望を意味していると言ってよい。

以上分析して来たテーマ、即ち宗教的表現を通して展開される性的想像以外に、作者の肉体的生命力への讃歌を裏づけるものとして、「マルドロールの歌」全編を支配する「動物世界」への嗜好を挙げる事が出来よう。「マルドロールの歌」に於て、人間が極く抽象的にしか取り扱われていないのに対し、動物への言及は、その出現回数、種類の豊富さ、それをもとにして展開される想像の豊かさに於て圧倒的比重を占めている。人間社会の硬化したモラルと、そこから生じる様々な悪や不条理に激しい憤りの念を禁じ得無い作者が、動物の世界に自由とある種の憧れを見出すのは当然のことであろう。そこでは神も人間もモラルも問題にはならない。動物達はただあるがままの生を受け入れ、自然界の法則の命ずるところに従って彼等の生を終えるのである。この様に、「マルドロールの歌」に於ける動物世界の比重の大きさは作者の人間の文明社会への嫌悪によって説明されるが、とりわけ、肉食動物への嗜好は、主人公の行う「悪」の意味を解明する上で重要な手がかりを我々に提供するものと思われる。ロートレアモンは、しばしば、好んで肉食動物の戦闘場面を作品の各所で描いているが、それは、作者が彼等の凄絶な闘いの中に生命のある純粋な営みとでも言うべきものを認めるからであろう。肉食動物の生存は、いうまでもなく他の動物の肉の犠牲をその必要条件としている。言い換えれば、彼等は「悪」を犯す事無しには自らの生命を維持する事が不可能なのである。作者が肉食動物の戦闘に多大の興味を抱くのは、彼等を支配するこの「悪」の掟が、戦闘の場面で最も顕著にあらわれるという理由に基づいている。人間同志の戦いの中に、卑劣さと醜悪さ以外の何物も見出さない作者が、第二の歌第十三節に描かれる難破船の犠牲者の手足を奪い合う鯨達の闘いの残酷さを前にして、

「その時迄未知のものだったある感動が次第に募って来るのを経験する」

のである。作者の、この動物的生命力への讃美は更に押し進められて、ついにはマルドロール自身の動物への変身の願望に迄至る。この代表的一例として、第二の歌第十五節の大蝟カマキリに姿を変えたマルドロールと創造主との戦いのエピソードが挙げられる。蝟 — 特に巨大な蝟 — は通常、不吉でグロテスクな存在とみなされている。が、ロートレアモンの世界に於ては、作品の他の箇所でも作者が蝟に向かって

「地球上の住人のうちで最も美しいものよ」

と呼びかけている事からも察せられる様に、蝟は美を具現する存在として登場する。ここに我々は、倫理上の固定化された諸概念に対する反抗と同様、審美上の伝統的基準を破壊しようとする作者の試みを読み取る事が出来る。ここで、「蝟の足」という攻撃手段につ

いて一言触れておかねばならない。マルドロール＝大蛸対創造主との戦いも、前に挙げた幾つかの例と同様、二種類の暴力の複合体として描かれているが、最初に、創造主に対する怒りの表現としての暴力に対応する側面について述べよう。バシュラールも指摘する通り、大蛸の足はこの場面に於て、ある柔軟さの象徴としてたちあらわれている。その持つ攻撃性は、決して「爪」や「嘴」の攻撃性の様に素早い、直線的な性質のものでは無い。それは、ゆっくりと、しなやかに自らの攻撃を遂行する。バシュラールによれば、「蛸の足」とは、「打ち勝ち、つつみこみ、所有する為には、たわむ事も知っている意志の実現」である。「蛸の足」の持つ意志は、まさに、創造主と人間に対する作者の戦いの執拗さを象徴していると言って良い。次に、この場面に於ける性的想像力を支える一要素として機能しているものに、「蛸の足の吸盤」がある事を指摘せねばならない。「爪」や「歯」の欲求と同じく、「吸盤」の欲求が、性的衝動の基本行為的に呼応する事は間違いのない事実である。この戦いの場面は、大蛸に変身したマルドロールが創造主の体を八本の長い足で締めつけ、無数の吸盤でもって創造主の体内の血をたっぷり吸い取る、という描写で終わっているが、この、血液の移し替えというモチーフは、これまでの幾つかの例に於ても明らかだった、魂偏重の否定、動物的生命の賞揚という作者の主張を暗示していると考えてよい。

以上、「マルドロールの歌」に於ける動物世界の意味を、主人公によって実践される「悪」の意義の解明という方向に於て捉えて来た。これまでで明らかになった事は、主人公の行う「悪」は、我々人間存在——動物をも含めて——の根底に分ち難く結びついている悪、換言すれば、肉体的生命に本来的に刻みこまれている悪を指しているのであり、それが、作者の讃美の対象となっているということである。こうして作者はキリスト教による魂の偏重を否定し、肉体性の復権を唱えているのだが、果して作者は、人間の肉体的生命の重要性、聖性のみを歌う事に専念しているのだろうか？ 肉体の盲目性の中に閉じこめられたままにとどまろうとするのだろうか？ 絶対君主としての神の支配から逃れた後、作者は、今度は、本能の暗黒の力に身を委ねるかにみえるが、決してそうではない。第五の歌第三節では、作者が次の様に告白しているのが聞かれる。

「それでも、時には夢を見ることもある。が、自我を持ち続けているという強烈な感覚と、自由に動くことが出来る能力とを一瞬も失う事は無いのだ。暗がりの燐光を放つ隅に潜んでいる悪夢や、僕の顔を折れた腕で撫でる熱病や、血だらけの爪を立てる汚らわしい獣どもは、よいか、いつまでも彼等を活動させる様に絶えず餌を与えてやろうとして、彼等を環になってぐるぐる廻らせているのは、僕の意志なんだぞ」

このパラグラフに於ける「悪夢」は、恐らく、主人公によって犯された数多くの犯罪を指していると考えられるし、「血だらけの爪を立てる汚らわしい動物」は、言うまでもなく、作品のあちこちに姿を現わすあの肉食動物達のことである。作者はこれらのものを讃美し、これらのものに非常な価値を置く。が、決してそれに支配されるがままになるのではなく、逆に、これらのものに対する、自分の自由意志の支配権を宣言するのである。

確かに、作者は人間の肉体性を強調しはするが、それは、あくまでキリスト教の魂偏重の否定を目的としているのであって、その中に永住する意図を持つものではない。つまり、作者は、自分の描く「悪」を、一種の「てこ」の如きものとして用いているのである。換言すれば、マルドロールの犯す「悪」とは、歴史を展開させる原動力であると言う事が出来よう。

以上、マルドロールのサド・マゾヒスト的暴力を通して表出される「悪」、人間存在の根底に不可分のものとして横たわるところの「悪」を、我々の考察の対象として取りあげてきたのであるが、次に、これまでのものとはその性質を異にする、他の幾つかのマルドロールの犯罪についての解釈を、試みなければならない。

ところで先ず最初に、当時の社会に於て一般的、伝統的であった「善悪」についての捉え方を、簡単に述べておく必要が有ろう。キリスト教が支配的であった十九世紀ブルジョワ社会に於ては、善と悪とは、明確に峻別され得るものであった。神は全ての「善」の代表であり、サタンは全ての「悪」を司っていた、が。こうした精神環境にあって、作者は「善悪」についての固定的、平面的把握の姿勢に疑問を投ずるのである。「善と悪とは二つの異ったものなのか？ そうだ、むしろ同じ一つのもので有って欲しい」この観点から、作者は主人公の犯罪を手段として、既成の固定観念を破壊しようと試みるのである。ここでは枚数の制限上、例を引用しての詳述は控えることにするが、「悪」の感情によって、反作用的に引き起こされる「善」の感情を描いた例（第一の歌第十一節）、或いは、行為としての「悪」が、目的としての「善」の中に組み入れられ得る例（第二の歌第三節、第六節）などを通して、作者は、断面的に切り取られた場に現われる善悪についての思考から、時間的要素の介入を許した思考への転換を唱えている。

さて、作者は、マルドロールの「悪」を手段として、「善悪」の関係についての考察を行った後、更にそれを異った次元へと移し変える。ここで再び、第二の歌第十三節の難破船のエピソードを取り上げよう。船の沈む荘厳な風景を、岸辺から見守っていたマルドロールは、一人の若者が岸に向かって泳いで来るのを見つける。それを目にしたマルドロールは、若者が、あと少しの努力で目的の場所に辿り着こうという瞬間に、ピストルで彼の命を奪ってしまう。この殺人の動機を、人類に対する憤りの故だと考える事は出来ない。何故なら、殺人の対象は、マルドロールが愛情を抱いている、あの純真な少年達の一人だからである。又、この行為の中に、サド・マゾヒスト的欲望のしるしを認める事も不可能である。作者は、この殺人を犯す時の精神の状態を説明して、次の様に述べている。

「僕の理性はふっ飛んではいけない。犯罪を犯す時、僕は、自分のやっている事が何であるかをちゃんと承知している。僕は、自分のやる事以外の事をしようとは、思ってもいなかった」

この言葉が示す様に、殺人の動機は、人類への怒りの発作にあるのでも無ければ、本能の要求に基づいているのでも無い。マルドロールは、自らの理性の命ずるところの、ある



決意に従って、この犯罪を遂行するのである。彼は、自分を束縛するあらゆるもの、モラル、法的拘束力、良心などからの解放を自らに保証する手段として、この犯罪が必要である事を、知っている。この犯罪の結果、全き精神の自由を獲得したマルドロールは、今や、如何なる悪をも犯す自由を手に入れたと同時に、如何なる善をも行うことの出来る状態にある自分を見出すのである。事実、マルドロールは、セーナ川で溺死しかけた青年の命を救うのだが、彼の行為は、決して、モラルの力の支配の結果ではない。彼にとって、「悪」を行う役割を演ずる事が自由であると同時に、「善」を行う役割をも、思うままに演ずる事が可能なのである。この様にして、実験的に行われた「悪」を媒介にして、マルドロールは、善悪を超越した精神の自由な境地に辿り着くことに成功する。

以上、我々は、「マルドロールの歌」に於て、主人公マルドロールの犯す「悪」の意味の解明を試みてきた。ところで、今後、我々の主人公の犯罪は、どのような形をとることになるのだろうか？ この問いに答える為に、我々は、第六の歌で物語られるマルドロールの最後の犯罪を、ここで取り上げなければならない。この犯罪の犠牲者となるのは、マーヴィンと呼ばれる、イギリスの良家の息子である。マルドロールは、この少年に、自分に対する尊敬と思慕の情を植えつけて置きながら、自分に会う為に、約束の場所に現われた少年を裏切り、彼を捕えて、ついにその命を奪ってしまう。我々がこれまで見てきたマルドロールの犯罪は、常に、何らかの理由、正当性、後悔或いは快樂といった、人間的感情に伴われていた。が、マルドロールの、この最後の犯罪に、我々は、一切そういったものを見出す事は出来ない。描かれるのは、唯犯罪の行為のみである。マルドロールの他の犯罪が、常に、何らかの目的を持った行為であったのに対し、この殺人は、まさに、その行為自体を目的として行われるのである。作品の初めで、「悪の道」をたどることを決意した主人公は、今や、彼の最後の犯罪によって、完全な「悪」、純粋な「悪」を実現する事に成功する。犯罪の最後の場面は、マルドロールの辿った「悪の生涯」の終結を暗示して、興味深い。ここにその概略を紹介しよう。犠牲者の少年、マーヴィンを捕えたマルドロールは、自分の助手である一人の狂人に命じて、少年の足を、長い綱の先端に縛りつけ、もう一方の端を持って、オベリスクの塔のてっぺんで、自分を中心にした大回転運動をおこさせる。そして、空中を走る少年の体が最高のスピードを獲得した瞬間、マルドロールは、綱を持っていた手を開く。少年の体は空中を突切り、セーナ川を越えて、パンテオンの円形ドームに激突する。この時、空中を飛ぶマーヴィンは、付与されたすい星という比喩の共通性 — 作者は、別の箇所では、マルドロールをすい星に譬えている — によって、マルドロールの分身を表わしていると考えてよい。今や、純粋悪のシンボルと化した、マルドロール=マーヴィンの体は、現実の善悪 — 彼が飛び越えるパリの町によって、象徴される — を超越して、空中を走る。が、この飛翔は永遠に続くのでは無い。パンテオンのドームへの激突は、作品の中で歌われる「悪」の役割が、これをもって終結した事を暗示している。歴史の発展の原動力であったマルドロールの「悪」が、その究極点にまで押

し進められ、完璧な純粹性と、独立性を獲得した瞬間、それは現実から離脱し、否定の働きというその本来の存在理由を失う事になるのは、当然の成行である。その結果、マルドロールの「悪」そのものが、次に否定され、乗り越えられることになる。ここに、第一作、「マルドロールの歌」を否定し、「ポエジー」と題された、第二作の最初のページに、作者が、次の様に記す所以がある。

「僕は、憂愁を勇気に、疑惑を確信に、絶望を希望に、悪意を善に、不平を義務に、懷疑を信仰に、屁現屈を沈着冷静に、傲慢を謙譲に置き換える。」

(旧姓安部 D 2 年在学中)